

## II. 調査結果の分析

### 6. 10 年間の保護者の変化

「ひとり親家庭が増えた 64.8%」と最も高い割合での結果が出ています。それに伴って「親としての意識が薄れた 52.9%」という結果が出ています。子どもを育てていく親が意識やその形態を変えてきた結果が示されています。その上で「権利意識が強くなった 44.5%」となっています。さらに子どもが育つ中で子どもに関わる為に必要な「コミュニケーションをとりにくい親が多い 35.4%」となっています。

10 年前といえばエンゼルプランが始まった年でもあります。育児の不安から来る虐待が大きな問題になり始めたことや、少子化が加速度的になったことで就労支援としての保育園機能の拡充も保育園が次々に課せられました。病後時保育、休日、祭日、夜間保育などなど本来の枠にとどまる事の無い様々な保育メニューが出されこなされてきました。利用者である親を主体にした形で展開され充実してきました。仕事と子育ての両立を求める親の要望に応える形で展開され充実してきたのです。さらに子育て支援センターが保育園に併設され保育園の持つ子育ての知識や機能が広く地域の親子の為に活かされてきました。

子どもが自然な形で幸せに育まれていく為には、今まで当たり前の様にあった様々な必要なものがあります。例えば父親と母親という二人の親が必要です。又、親が親としての自然に持つ意識、自分の子どもが大切な存在であり、かわいいと思える事がが必要です。親なりに親として関わっているつもりでも、やはり傍らにいてしっかりとしないものを感じる事が「親としての意識が薄れた 52.9%」という数字は、育児と仕事を必死で両立させ頑張っている親にも限界があり、限られた時間の中での子どもの関わりの結果すべての親が、親である自分自身を器用に育てられるはずが無いという表れでもあると思います。その結果離婚による一人親も多いのです。「一人親家族が増えた 64.8%」という数字の上での結果が出ています。親なりに一生懸命子育てをしていることは理解しているつもりでも、愛情のかけ方がこれ程までにズレ、分からないのかと思う事も日々感じます。権利主張をしていくことも大切です。しかしあくまで、自分自身の子育ての責任は、どこまでも親である自分にあり、結果は誰のせいでも無い自分自身に戻ってくる事をしっかりと確認していく事も不可欠です。理論構築や、様々な情報をもしも自分勝手な育児の為に振りかざす親が存在したとしたら、しっかりとした保育の質と理論や科学的な説明、そして何よりもお互いに、子どもを大切に思う気持ちの具体的な確認をしていく話し合いが必要です。「コミュニケーションを取りにくい親が多い 35.4%」とありますが、現場での保育に当たっていて、しっかりと向き合って話し合えば一人一人とコミュニケーションを取る事が今までと変わらずできる実感があります。ただ、なぜ取りにくいのかといえば、関わるもの全員に関して言える大きな問題があります。それは、「コミュニケーションを取る為の時間がない」

という事です。みんな忙しいのです。ばかな事と思って軽く考えられない大きな問題です。時間というゆとりが無いのです。世の中が豊かになり情報が溢れ余りにも多い中で、一方的な情報が流れていく中で自分自身の考えとして消化していく事ができないまま溜まっていき不安が育っていく、つまりどんないい考えや方法であっても自分自身の中で一度じっくり自分で考える事無しには、自分の考えとして自分自身の中に持って行く事ができません。ぴったりとこない気持ちや、分からない事を確認していく事ができきれぬことが積み重なっていきます。「育児不安の親が増えた 26.7%」は当然の数字で、もっと多い割合である事が予測されます。保育園の機能のひとつに、育児相談があります。育児していく中でのどんな些細な事でも保育園で何時でも聞く体制ができています。例えば、こんな相談がありました。「子どもに飴を食べさせた事が無い為、もしも行事などでおやつに出てきたら、喉に詰まって窒息してしまう可能性がある。十分な注意を払っていただきたい。」一度、物を喉に詰ませた経験がその後も不安につながっていました。不安を感じる本人自身の気持ちは、他人には分からないものです。保育園での相談により丁寧に自分の不安を聞いてもらった事で、安心していく方向へと向かっていきました。以前に比べ子育てをする親に対する様々な支援は、増えてはきました。「父親や祖父母が子育てに協力的 15.9%」という事もどこの園でも送迎に以前より多くの父親や祖父母の姿が見られる様になった事からも分かります。当然の結果と思いつつ「子育てを楽しむ親が増えてきた 2.30%」と子育てを楽しんでいる事がたった2%の親からしか感じられない事に対し子育てが大変なものであり、出生率が増加しない事は、当然の結果であると現実を改めて認識しました。